

CALLを取り入れた対面式授業 「基礎英語」授業実施報告

高橋 歩

An Attempt to introduce CALL to an English Class

Ayumi TAKAHASHI

This paper reports on the contents of an English class, "Basic English," and the results of the student questionnaire conducted during the class. Basic English was conducted in a multimedia classroom, and an attempt was made to introduce CALL into classroom activities. The results of the questionnaire showed that the majority of the students were in favor of CALL.

Keywords : Basic English, CALL, questionnaire, Communication portal system

1 はじめに

新潟大学では、平成18年度第1期にCALL (Computer Assisted Language Learning、コンピュータ支援外国語学習システム) を取り入れた授業が3コマ開講された(全学英语の「基礎英語」1コマおよび「発展英語」2コマ)。このうち、著者は工学部2年生の「発展英語」を担当し、大学生初級用英語教育CD-ROM教材Listen to me!シリーズ「First Listening」を使用して授業を実施した。第1期CALL授業受講学生に実施した授業アンケートによれば、コンピュータを利用した英語学習だけでなく、従来型の「対面式授業も取り入れたほうがよかった」と答えた学生が、前掲の3クラス全体の31%に及んだ。授業担当教員としても、授業時間のすべてをCALL学習にあてるより、CALL学習と従来型の対面式授業で行う活動の両方を取り入れる方が良いと感じた。そこで、平成18年度第2期「基礎英語」では、対面式授業を主に一部CALLを利用した活動を取り入れる授業を試みた。折りしも新潟大学では平成18年8月に学務情報システムが刷新されていた。新たな学務情報システムのコミュニケーションポータルシステム上の様々な機能を利用すれば、コンピュータを利用した英語学習をさらに充実させることが可能になる。

本報告は、平成18年度第2期「基礎英語」の授業内容と授業アンケートの結果を報告し、新潟大学における今後のCALL授業の可能性を探ろうとするものである。

2 CALLについて

当該授業の報告をする前に、CALLについて少し述べておきたい。CALLには大きく分けて次のような形態がある。

- (1) 外国語学習ソフトを使用し、個人で学習する。
- (2) 教室で外国語学習ソフト・電子メール・インターネットなどを使い、外国語のクラス授業とする。
- (3) インターネット上に置かれた外国語学習ソフトを使うオン・ライン学習。

(京都大学東郷雄二のホームページより)

著者が平成18年度第1期に担当した「発展英語」では、(2)「教室で外国語学習ソフト」を使う形のCALL授業を行った。学生はソフトを持ち帰り、教室以外でも(1)「外国語学習ソフトを使用し、個人で学習する」ことも求められた。本報告で取り上げる第2期「基礎英語」では、「マルチメディア教室で機器を使用し、新潟大学コミュニケーションポータルシステム上の機能を利用して」授業を行った。

3 授業の目標

全学の「基礎英語」の目標に加え、当該授業では、次のことを目標とした。

- (1) 科学やITについて書かれた英文を読み、読解力を養成する。
- (2) ディクテーションなどのリスニング練習を通してリスニング力を強化する。
- (3) 英文を素早く正確にタイプする能力を養成する。

4 授業計画

「基礎英語」は、第2期に開講された半期の授業である。以下のように授業が進められた。

- 第1回：聴講登録・ガイダンス
第2回－12回：対面式授業+CALL学習
第13回：定期試験（筆記試験および英文タイピング試験）

5 授業の実際

5.1 受講学生数と使用教室

当該授業は、平成18年7月に新潟大学で実施されたTOEIC IPテストで470点に達しなかった工学部1年次学生向けのクラスである。受講学生数は、工学部1年次学生44名、農学部1年次学生1名の合計45名であった。総合教育研究棟第3マルチメディア教室で授業を行った。

5.2 教材

CALL用教材は用いず、従来型対面式授業で使用されるテキストを使用した（Jim Knudsen著、「FUTURE SMART English for Today and Tomorrow インテリジェントな未来へ」、南雲堂）。このテキストは、読解力、語彙力、リスニング力を身につけられるようデザインされた総合教材である。扱っているテーマの多くはITに関することである。

5.3 授業の具体的方法

授業回数は90分×13回であった（休講2回）。毎回の授業の流れを次に示す。

- (1) 学生は着席後すみやかに、各自PCを立ち上げる。
- (2) マルチメディア機能を利用しながら通常の対面式授業を行う。
- (3) 個々の学生がPCを使用して小テストに答えたり、タイピング課題に取り組む。

対面式授業を行いながら教室に備え付けの機器を利用した。例えば、テキストなど提示したいものをカメラに映し出し、学生PCモニターに転送して見せた。テキストの練習問題やリスニング練習の答え合わせは、すべてカメラを利用して解答を学生PCモニターに提示する方法で行った。教師卓PCモニターに映し出されたものを学生PCモニターに転送する機能もある。この機能は、学生にPCの使用方法やポータルシステムの利用の仕方を説明する際に利用した。また、教師卓PCのワードソフトを起動させワード文書に文字を入力し、この教師用モニターを学生モニターに転送して提示し、板書の代わりとした。

新学務情報システムのコミュニケーションポータルシステムの小テスト機能を利用して、学期中に3回小テストを実施した。あらかじめポータル上で小テストを作成しておき、授業時間中に、学生がポータル上に提示される小テストに解答するよう指示した。学生が

小テストを「提出する」をクリックすると、答えたものがその場で教員に送信されるようになっている。小テストの答え合わせは、先に述べたように解答をカメラから学生PCモニターへ転送する方法で行った。

毎週授業の最後に、20分間ほど英文タイピング練習を行った。短いパッセージ（100語程度）を配布し、学生はそれをタイプして提出することが求められた。課題の提出には、ポータルシステムの電子メール機能を利用した。学生は、電子メールの文章中に課題パッセージをタイプし、授業終了までにメールを教員へ送信することが求められた。始めのうち、提出までに30分以上かかる学生がおり、授業が休み時間に食い込んでしまった。しかし、練習を重ねていくうちに徐々にタイピングの速度も上がり、ポータルの電子メールの使用にも慣れてきたようで、かかる時間は短くなった。学生のメールアドレスの送信済みファイルに記録が残るため、提出させたタイピング課題は返却しなかった。ただし、電子メールで返信し、課題を受け取ったことを連絡した。新学務情報システムのコミュニケーションポータルシステムでは、非常勤講師にもメールアドレスが割り当てられたので、このアドレスを利用して学生との電子メールのやり取りを行った。さらにVPNサービスに登録したので自宅PCからインターネット経由で学内ネットワークを利用することが可能になり、提出物の確認や採点は自宅で行うことができた。

6 成績評価の方法

定期試験を60%、授業中に提出するタイピング課題および小テストを40%として評価した。定期試験は、従来型の筆記試験とコンピュータを使う英文タイピング試験の両方を行った。タイピング試験では、課題パッセージを配布し、それをタイプして電子メールで提出させた。制限時間内にどれだけ正確にどれだけ多くタイプできるかを評価した。

受講者45名のうち、4名が定期試験を受験しなかった。

7 授業実施の結果

7.1 学生アンケート

新潟大学で実施する授業アンケートの他に、本授業独自で学生にアンケートを実施した。アンケートの質問項目は、第1期CALL授業（「基礎英語」および「発展英語」）で使用したものに一部修正を加えて作成した。このアンケートは、コミュニケーションポータルシステムのアンケート機能を利用して作成され、学生は授業時間内にコンピュータ上で回答した。アンケートを「提出する」をクリックすると、その場で教員に回答が送信されるようになっている。

アンケート結果は次のようであった。

アンケート結果

	非常についた	多少ついた	どちらとも言えない	あまりつかなかった	全くつかなかった
1) リスニング力がついた	0.0%	51.2%	26.8%	17.0%	4.9%
2) リーディング力がついた	0.0%	68.3%	17.0%	12.2%	2.4%
3) スピーキング力がついた	0.0%	4.9%	46.3%	34.1%	14.6%
4) ライティング力がついた	0.0%	24.4%	43.9%	26.8%	4.9%
5) ボキャブラリーが増えた	非常に増えた	多少増えた	どちらとも言えない	あまり増えなかった	全く増えなかった
	4.9%	73.2%	12.2%	7.3%	2.4%
6) 英文タイプ能力がついた	19.5%	68.3%	4.9%	4.9%	2.4%
7) 文法の理解が深まった	非常に深まった	多少深まった	どちらとも言えない	あまり深まらなかった	全く深まらなかった
	2.4%	34.1%	41.5%	17.0%	4.9%
8) 異文化理解に役立った	非常に役立った	多少役立った	どちらとも言えない	あまり役立たなかった	全く役立たなかった
	12.2%	22.0%	36.6%	24.4%	4.9%
9) 学習内容に興味をもてた	非常にもてた	多少もてた	どちらとも言えない	あまりもてなかった	全くもてなかった
	14.6%	63.4%	14.6%	7.3%	0.0%
10) 教材のレベルは自分に合っていた	非常に合っていた	合っていた	どちらとも言えない	あまり合っていなかった	全く合っていなかった
	12.2%	46.3%	22.0%	19.5%	0.0%
11) 従来型の対面式授業だけの場合よりも、集中して学習できた	非常にできた	多少できた	どちらとも言えない	あまりできなかった	全くできなかった
	26.8%	36.6%	31.7%	4.9%	0.0%
12) 機会があれば今後もコンピュータで英語学習をしたい	非常にそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない
	34.1%	41.5%	7.3%	14.6%	2.4%

*小数第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならないものもある。

まず、この授業の目標としてあげている3つの点、つまり読解力、リスニング力、英文タイプ能力が養成されたかどうか学生の回答をみると、「リスニング力がついた」(『非常についた』+『多少ついた』=51.2%)、「リーディング力がついた」(68.3%)、「英文タイプ能力がついた」(87.8%)と、いずれも半数以上の学生が肯定的な回答をしていた。特に英文タイプ能力については、大多数の学生がその能力が養成されたと思っていることが明らかになった。これには、今までそのような訓練を受けたことのない学生が多かったことも起因していると思われる。実際、学期始めに質問したところ、英文タイプをしたことのない学生が半数ほどいた。「ボキャブラリーが増えた」(『非常に増えた』+『多少増えた』=78.1%)も肯定的な回答がほ

とんどだった。学生は、授業中に行ったリーディングやリスニング練習を通して語彙力が増強されたと感じたようだ。その反面「スピーキング力がついた」(『あまりつかなかった』+『全くつかなかった』=48.7%)、「どちらとも言えない」46.3%)および「ライティング力がついた」(31.7%、43.9%)は、否定的な回答が多かった。当該授業では、この2つの能力を伸ばす練習は行っていないので当然の結果だといえる。「学習内容に興味をもてた」(『非常にもてた』+『多少もてた』=78.0%)および「教材のレベルは自分に合っていた」(『非常に合っていた』+『合っていた』=58.5%)に肯定的な回答が多かったことは幸いだった。「従来型の対面式授業だけの場合よりも集中して学習できた」(『非常にできた』+『多少できた』=63.4%)

は肯定的な回答が多かったが、同時に『どちらとも言えない』と答えた学生が3割以上いたことも明記すべきであろう。「機会があれば今後もコンピュータで英語学習をしたい」と答えた学生の割合は、『非常にそう思う』+『ややそう思う』=75.6%であり、多くの学生が今後もCALL授業を受講したいと思っていることがわかった。しかしその反面、『あまりそう思わない』あるいは『全くそう思わない』学生が17.0%いたこともわかった。

7.2 気づいたこと

まず、マルチメディア教室で英語の対面式授業を行うのには無理があると感じた。教員の声が学生に届きにくい、LL教室ではないため、教員の声を学生PCのヘッドセットへ流すことができない。したがって、ワイヤレスマイクを使う必要があった。同様に学生の声も聞こえにくく、彼らにもマイクを使って発言してもらいしかなかった。また、学生PCのモニターが邪魔になり、教卓から学生の顔や手元が良く見えなかった。

マルチメディア教室はCALL教室ではないため、CALLを行うのにも不便な点がいくつかあった。教員がカメラを利用して英文テキストなどを学生PCモニター上に提示するとき、当たり前ではあるが、学生はそれと同時に自分のPCを使うことができない。教員が提示したものを読みながら、学生がPCで作業できるような環境であれば、より充実したCALL学習ができるのではないか。2005年に視察に行った東北大学のCALL教室では、個々の学生が使用するPCモニターの他に、教師卓PCを転送して映すモニターがあった。このモニターは、学生モニター2台の真ん中に1台ずつあり、学生は2人でひとつの教員提示用モニターを見するという形をとっていた。彼らはモニターに映し出されたものを見ながら各自のPCを使って作業を行っていた。

また、教員卓PCモニターの画像を学生PCモニター

へ転送することはできたが、その音声を転送することはできなかった。今後新潟大学で、マルチメディア教室を使いCALL授業を行っていくのであれば、教室内設備の整備をする必要もあると考える。

8 今後の展望

今後も新潟大学において、いろいろな形態のCALL授業が行われると思われる。現在行われているように、CD-ROM型のCALL用ソフトウェアを使用する授業もあれば、ネットワーク接続型の教材を利用するものもあるだろう。

CALLの実践は、CALL教材を使ったものに限られるわけではない。本授業で試みたように、CALL教材を利用しないCALLもある（ただし、教員の準備が大変ではあるが）。インターネットを利用したCALL学習というものもある。インターネット上には無料でアクセスできるウェブサイトが数多く存在する。それらは単語や熟語の学習、リスニング練習、ライティング練習、読み物など多岐にわたる。そのようなサイト上の練習問題などを、授業の目的に合わせて教員が選択し、学生に学習させることもできる。また、インターネット上の教材をCALL用教材と組み合わせて利用することもできる。さらに、新学務情報システムのコミュニケーションポータル機能（レポート、小テスト、アンケート、電子メールなど）を活用することでより充実したCALLを行うことが可能になるだろう。

参考資料

京都大学東郷雄二のホームページ <http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/call.html>

竹蓋幸生監修（2001）「Listen to Me!シリーズFirst Listening」千葉大学

竹蓋幸生・水光雅則編（2005）「これからの大学英語教育」岩波書店